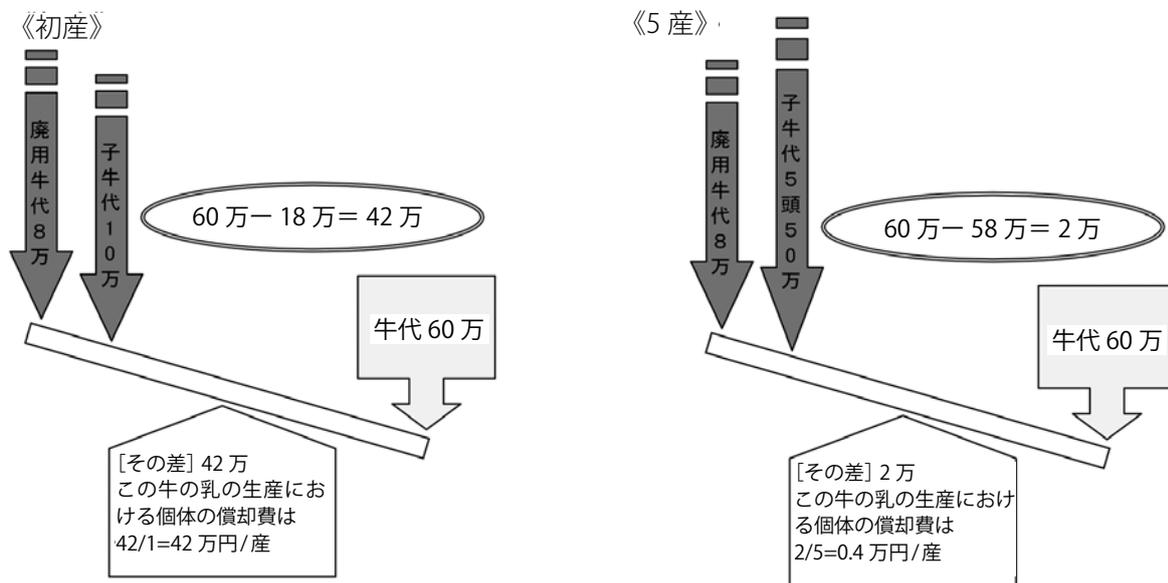


【牛のコスト計算】

毎年確定申告でお悩みの方が多いと思います。広酪ではDMSシステム(Dairy-Farm Management Support System)を利用して全酪連と共に農場の現状分析と共に経営分析を行なっています。全国における経営分析の結果、経営を左右する共通要因は事故・廃用の多い牧場は儲からないということです。

乳牛を淘汰すると確定申告の際に処分損(益)を計算されていると考えますが、実際の申告作業では個別の牛についてあまり認識をされていないように思えます。各乳期において、牛は生乳を生産し稼ぎを生み出してくれますが、それ以外の稼ぎとして①子牛、(仮に全頭F1を分娩させ、雄雌平均10万とします。)②自分の廃用牛代(立って、歩いて出て行き平均8万としておきましょう)があります。「乳代」-「餌代」はその年々の儲けと考えます。

◎牛自体の各産次における経営的負担を極端に表すようになります。



産次	導入牛代(育成代)	子牛代計	廃用牛代	差額(経営的負担)
初産次	-60万円	10万円	8万円	-42万円/年
2産次	-60万円	20万円	8万円	-16万円/年
3産次	-60万円	30万円	8万円	-7.3万円/年
4産次	-60万円	40万円	8万円	-3万円/年
5産次	-60万円	50万円	8万円	-0.4万円/年
6産次	-60万円	60万円	8万円	+1.3万円/年

【まとめ】

牛本体を償却するための負担は乳代による収入を考慮しなくても、3産を超えると急に低下します。逆に初産・2産で廃用となる牛は、少々多めの乳代では追いつかないくらい経営には大きな負担となることが良く分かります。

飼料が高騰する中、同じ1頭の牛から高乳量を得るのは勿論大切であります。しかし、事故を防ぐことで『費用の安い牛から搾る』発想と努力が収入に直結することを認識頂きたいと思います。せめて、4産以上を目指して載せたいと考えますが如何でしょうか？

事件は現場で起きています



牛1頭の重み ～牛は何産していますか？～

広酪事業推進課 係長 大島達夫

広酪組合員の飼養牛が「何産」で淘汰されているかを把握してみたいと思います。平成24年5月の「らくのうだより」には(一社)中央酪農会議による「平均淘汰産次」のデータを記載致しましたが、中国ブロックでは3.8産という結果でした。

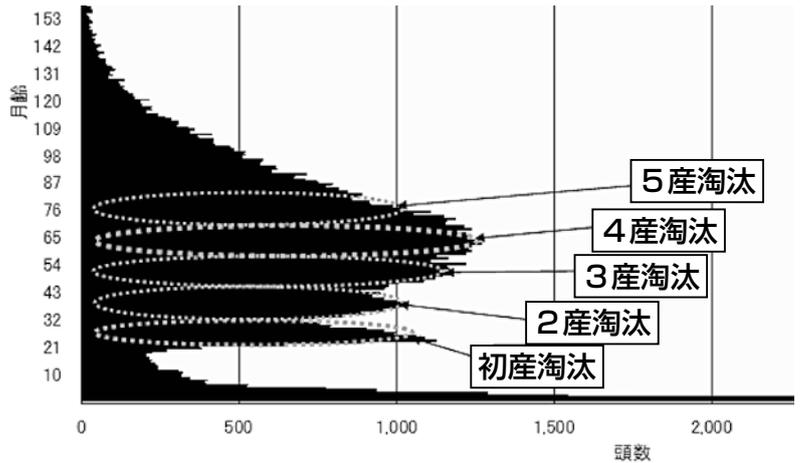
(独)家畜改良センターの公表データにより、広島県で死亡した月齢別・牛の種別・性別の死亡頭数(平成23年度)を把握することができます。それによると、全国と広島県では以下のような特徴があります。

全国と北海道では、生後まもなくの大きな集団を除けば4つめの山が最も大きくなっており、これは4産次における淘汰の発生と考えられ、先の家畜改良センターにおけるデータどおり、乳牛にとって4産というのが大きな山場であるのが良く分かります。また、初産時と考えられる時期にも大きな廃用の集団が見られます。

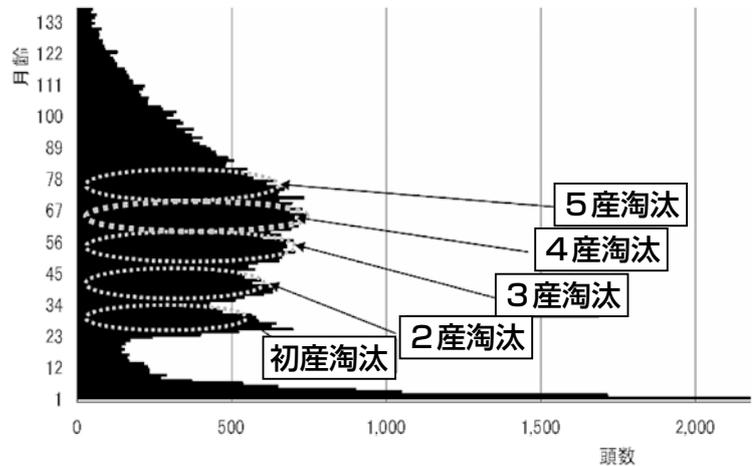
育成時期においても、生後間もない時期の廃用頭数が非常に多く、それに比較して『広島県』は、3産の軸にも大きな淘汰の山が見られます。このことは、北海道や全国平均に比較して、4産を迎えられない牛が多いことが見て取れます。また、特に問題として着目したのが初産の淘汰頭数が高いことであります。自家育成牛率が低い中で経営損失が著しく表れている結果が気になります。

『耳票装着されることなく死亡する子牛が農場庭先では相当数存在する点を考慮すると、生後2ヶ月以内の飼養管理が如何に重要か良く分ります』

【月別廃用頭数(全国)】



【月齢別廃用頭数(北海道)】



【月齢別廃用頭数(広島県)】

